ときには、幸口

19

◇幸福はおカネで買える？

松本道介
Matsumoto Michisuke

幸福とはどんなものだろう？　ありふれた質問ながら、七十をこえるまで幸福という言葉の意味をまともに考えてみる機会がなかった。

辞書よりもトルストイ

その私が最近ひとまえで、幸福について話す羽目になり、まずは生まれて初めて幸福という言葉を辞書でひいてみた。

ところが意外にも辞書にはたいしたことがなにも書いてない。手元の新明解国語辞典には〈現在の環境に十分満足出来て、あえてそれ以上を望もうという気持を起こさないこと〉とあり、嬉しいとか楽しいとかいった言葉はまったく出てこない。

他の辞書を見ても似たような説明なので、いささかがっかりするとともに、トルストイが「アンナ・カレーニナ」の書き出しにしした有名な文章にも納得のいく気がした。それは〈幸福な家庭というものはどれもこれも似たりよったりだが、不幸な家庭のありようはそれぞれに異なる〉という文章で、どうやら、幸福な家庭も幸福それ自体もごく平凡な、ありきたりのしろものらしいのだ。

それゆえ小説のタネにはならないのだし、他方アンナ・カレーニナは不幸な家庭の奥さんだったからこそ小説のヒロインになれたのだ。

そう考えて一旦は納得したものの、なんだか釈然（しゃくぜん）としない。〈現在の環境に十分満足出来てあえてそれ以上を望もうという気持を起こさない〉なんて、まるで無気力や退屈の定義のようではないか。

辞書が幸福という言葉にこんな中身のない説明をつけているから、人間はそれぞれ勝手に中身を考えるしかないのだろう。したがって、幸福とは〈六本木にマンションを買うこと〉だの、〈高価なダイヤの指輪を買うこと〉だのと思う人が出て来てもおかしくないし、彼らにとって幸福はまさに〈おカネで買える〉ものなのだ。

だが、一方に〈幸福は決しておカネでは買えない〉と思っている人もいる。実のところ私もその一人だが、そう思う人間にとって幸福とは何であるのか。決しておカネでは買えない幸福とは何であるのか。そんな問いに対する答を求めるなかで、私にとって一番確かな幸福の定義はインディオの長老がふともらした言葉である。

「ニコニコしていることかなあ」

十年ほど前まで、南米のジャングルにイン

ディオの村を訪ねるテレビ番組がよくあった。インディオの村では、男は今でも弓矢を手に狩りに出て、射落した鳥などを持って帰る。一方、女たちは子供をつれて森へ行き、キャッサバと称するイモを掘り、これをすりおろしてアクを抜きパンを焼く――きわめて原始的な生活であるが、今から二、三千年前の縄文時代には我々の祖先も似たような生活を送っていたのだ。

私が十年前に見たインディオの村探訪番組のレポーターは一風変った人で、通訳を介して村の長老と話すうちに「幸福という言葉はありますか」という妙な質問を持ち出した。するとこの老人は困ったような顔をして「そんな言葉はないなあ」と答えた。インディオの人たちに幸福という言葉がないのは驚きであったが、老人もそれでは答にならないと思ったのか、しばらくして「まあ、みんながニコニコしていることかなあ」と言ったのが、今でも忘れられない。

この上なく単純な答だが、時を経るにつれこの上なく的確な答だとの思いは深まるばかりだし、みんながニコニコしていることというのは実に多くの意味を含んでいる。

例えば、人間は一人でいるかぎりニコニコすることはできない。一人でできるのはせいぜい一人よがりの薄笑いだけである。ニコニコするには親子、兄弟、夫婦、友人、仲間……がいなければならない。それにみんなが心身ともに健康でなければニコニコすることは出来ない……という具合で、人によってはたいへんやさしいのに、人によってはきわめて難しいことなのだ。その上〈みんながニコニコ〉はおカネだけ出しても到底買えないしろものらしい。

インディオの人たちにないのは幸福という言葉だけではなかった。十年前に見たテレビ番組のレポーターは今にして思えば本当に変った人で「幸福という言葉がありますか」に続いて「自然とか環境とかいった言葉がありますか」という質問もしていた。長老の答は自然という言葉も環境という言葉もないというものだった。

自然や環境という言葉がないのは文化が低いせいだろうか。いや、そうではない。インディオの人たちが自然や環境のまっただなかにくらし、自分たちを自然や環境の一部だと考えているために、そのような言葉を持つ必要がないのだった。

テレビ番組で見たインディオの人たちは明るい澄んだ目をしていた。みんなニコニコしていた。まさに幸福という言葉を必要としないほど幸福な人たちであった。

インディオの笑顔が消えた

しかし…その後インディオの人たちの生活からは急速に笑顔が消えていったらしい。三年程前に出た石弘之著「私の地球遍歴――環境破壊の現場を求めて」（講談社）によると、南米諸国は熱帯雨林を次々に伐採し、コーヒー畑や大豆畑にかえていくとのことだった。コーヒー豆や大豆を輸出しておカネ（外貨）をかせぐためである。

入植者たちはインディオを森に棲息するけものさながらに追い立て、抵抗すれば撃ち殺すこともあるという。絶望したインディオ、とりわけ若いインディオには首吊り自殺が多いというから本当にいたましい。

あの明るい笑顔、澄んだ笑顔の人たちを森から狩り出して死へ追いこむとは！　西欧に始まった近代文明の罪深さを思わないわけにはいかない。

（中央大学名誉教授）